

リコ（藤崎璃子）26歳、無職、県出身、現在都内在住

【生い立ち】

家族構成は父：雅樹（当時28歳）と母：綾子（当時30歳）長女として生まれる。3歳下に妹：美嘉。

雅樹は研究職で土日も職場に行くことが多かった。

綾子は専業主婦でいわゆる教育ママタイプ。

厳しく、当時のリコから見たら「いつもイライラしているヒステリックな人」というイメージだった。

幼少期から自分が欲しいと思ったおもちゃや漫画、ゲーム、可愛い洋服は買ってもらえたことがなくすべて綾子が決めたものしか与えられなかった。

本なら童謡、ゲームなら脳トレ。

その影響か、今でも綾子が嫌いそうなものを買う時は罪悪感を感じてしまう。

落ち着きがなくちょかまかと動くため綾子によく怒鳴られたが反発心が強く反抗した。

そうなると、綾子は押入れに閉じ込めたり食事を与えなかったりと強い罰で対抗。

口を開けば口論し、何がダメなのかもわからずやること全てを否定された感覚だった。

幼稚園の頃は、内向的で自分から友達と進んで遊ぶことができずにいた。

ひとりも好きだったが、とり残されることは嫌だったので友達から声をかけてくれることを待った。

時間をかけて仲良くなった友達には依存心が増して自分の思った通りにしてくれないと不安になり不満をぶつけるため悪循環となり、結果、距離をとられ寂しい想いをした。

小学生に上がると、勉強という好きでもないことをしなければならない環境がストレスで授業中じっとしているられなかつたり、

意識が次から次へと移るためひとつのこと集中することが困難で勉強が嫌いになった。

また、聴覚過敏などもあり教室の生活音がストレスで特に休み時間が苦痛だった。

内向的なところは相変わらずだったが、思い込みが強く、このままの自分ではいつか死んでしまうという思い込みがあって強引に積極的な自分をつくり声かけもするようになる。

また、家では綾子からの否定的な関わりもあって良くも悪くも我慢強くなり、反応してしまう気質を一時的に抑え込むことを学ぶ。

そうすることで、クラスメイトの視線に過敏になりつつも悪目立ちしないスキルを身につけた。

しかし、高学年の頃、クラスでいじめのターゲットを変える流れがあり、リコもハブられたり影口を言われ傷ついたが、ターゲットが変わり自分以外の誰かがいじめられていると庇うこともできず、そんな自分を強く責めた。

いじめられている子を守れなかった無力な自分も、助けてくれなかつた大人も、見て見ぬふりをしていたクラスメイトも、全てが気持ち悪く学校が大嫌いだった。

家に帰っても怒られるし、学校にいるのも辛い。

そんな時にネットゲームにハマり没頭した。

この頃から、ネット上の友達とオンラインでゲームをすることで、現実世界から身を守っていた。

ネットゲームの世界は、顔も本名も素性もわからないため、キャラクターを通して素直に慣れて、偏見なく接してくれる人たちがリコの支えとなった。

ただ、同世代の女の子だと思っていた人がおじさんだったり、自分が女だと知られると粘着されたり、出会い系のように使うユーザもいたのでそこにはとても注意しながら男の子のキャラクターを使った。

中学受験に向けて綾子の圧が増したが極端に避けるようになり、

食事を与えられなくても夜中にこっそり戸棚のものを食べたりして凌いた。

この頃から、綾子も妹の美嘉の方がいうことをきいて成績も優秀だったため、

「出来の悪い長女と優秀な次女」と割り切るようになる。

そのレッテルがリコを寂しくもしたが楽にもした。

受験をせず近くの中学校に入学。

共感的なコミュニケーションを強いる女子グループの圧が苦手で男子グループと関わることが増えた。

男子といふ方が余計な気遣いもせず楽だった。男子のノリで下ネタを行ったり芸人の真似などして男子と遊んでいたらクラスの女子からハブされることもあったがそれでいいと割切れた。

高校生になり、同調を強いる女子の圧も疎ましく、子どもっぽい男子のノリにも飽きてきた頃、世の中がつまらなく感じるようになり。

ネットゲームの世界でもどこか人間関係が疎ましく感じ少し距離を取る。

このままでは廃人になってしまふのではないかと極端は発想となり刺激を求めるようになる。

高一の夏、好きでもないがいいよってきた男子とSEXを済ませ、酒はほどほどに嗜み、タバコとやんちゃな薬（脱法）は一度で懲りた。

校則・法律違反のバイトもするようになりやりたいこと、欲しいものでいっぱいになる。

高2の頃、家出をして警察に補導され雅樹に迎えに来てもらうことがしばしば続く。

帰りの車で愚痴を聞かされるがスルーするスキルを身につけていたし、なにより迎えに来てもらうことがどこか嬉しかった。

バイトを転々としていくうちに気の合う年上の先輩たちと仲良くなり、そうなるとなおなら同年代の生徒が子どもに見えて学校がつまらなくなる。

先輩のなかから魅力的な男性にモーションをかけ言い寄られると付き合うがすぐに冷めてしまうことを2度繰り返し恋愛は向いてないと自己完結。

この頃、先輩たちに見習って親に頼らず自立することが目標となる。

高校卒業のタイミングで先輩の紹介で六本木クラブのホステスデビュー。

それと同時に実家を出て都内で一人暮らしをはじめる。

この頃は綾子も否定的な視線は送るが特に口も出さなくなっていた。

ホステスの仕事は、中学時代に培った男子のノリと女性性を使い分けることで指名を取っていき勤め始めて半年も経たないうちにナンバー入り。

周りのホステスの視線は気になったが店長をはじめ黒服のサポートもあって接客に集中できた。

接客業がここまで自分に向いているとは思わなかった。

また、稼げることと地位の高い男たちが自分を求めてくることで快感もあった。

客のうち数人と肉体関係にもなったがそういった客は歳が離れて父性的な側面を求めていたようにも思う。

天職だと思ったこの仕事も同世代が就職する23の歳になるとなんとなく続けれないとと思うようになる。

この今までいいと思えないし、仕事自体も飽きてきた。

止める店長をかわしスパッと辞める。

昼食に勤めるためバイトを始める。

イベントスタッフ、カフェ店員、美容部員とチャレンジするも、最初こそは楽しいと思えても1年持たずには辞めてしまう。

貯金も浪費癖もあってあっという間になくなっていた。

新しい仕事を探すもこれといって興味がある仕事がなく家賃更新のタイミングで美容部員の同僚:瑞希の家に居候。

【特性・性格・行動傾向】

無意識に刺激を求めるが、それは刺激がないと覚醒しにくく、眠くなったり脳にモヤがかかったような感覚になるため。

スッキリした状態に戻りたいために刺激を求めがち。

ドーパミンやノルアドレナリンなど神経伝達物質の働きが過剰。

苦労するとわかっているのに蛇の道を選ぶ傾向がある。

しかし、だからといって安心を求めていないわけではない。

本質的には安心で居心地がいい居場所を求めているが気質・体质がそれを邪魔する。

脳内は常に騒がしくフルアクセル状態のため疲弊し日中はずっと眠い。寝る時は気絶するように寝たりする。

衝動的で注意散漫で慌ただしい。

たとえば、左右別々の靴下を履くこともしばしば。

電気を消し忘れる。

財布やスマホをいつも探してゐる。

ズボラで出しっぱなしで部屋は散らかってる。

財布の中身はレシートだらけ。

冷蔵庫の4分の1は腐らさてる。

「乳製品の賞味期限の短さはプレッシャーでしかない」

慌ててスリッパで外に出たり、室内を靴で入ってきたり。

恋人にそのことで嫌味を言われても変顔して誤魔化す。

衝動的で余計なことを口走り相手を意図せず相手を傷つけることもしばしばある。

離人症的な感覚があり現実感がなく、まるでテレビの中に自分がいてそれを見ているような感覚は子どもの頃から今も時々ある。